

ムーンメモリア・ロストノイズ
四話・影を踏む男

雨和七瀬

ルークは研究室に戻るため、この時間に人通りが少なくなる廊下を選んで歩く。考え事をしながら歩くにはちょうど良いと彼は考えているが、それだけではない。それを裏付けるものとして、ルークは軍用施設と侍従の部屋には決して近づかない。

だが、どんなに気を付けていても『事故』は起こる。異物の魔物の討伐に必要な物が研究室に揃っているか考えていたルークに、一人の女性が話しかける。

「あ、あの！」

その緊張した声に、ルークは固唾を飲みながら振り返る。ルークはその女性とは面識がなく、服装からして位が高めの侍従であるということだけが分かった。

「……ご用件は？」

ルークは一步下がる。その様子に女性は驚いた様子を見せ、少し怯んだものの、話を続ける。

「あの、これを……ルーク様に受け取っていただきたくて」

女性は液体の入った小瓶を差し出す。しかしこの流れに嫌というほど見覚えがあるルークは小瓶を握られないように腕を組んで答える。

「申し訳ないが、そういった類の物は受け取らないことにしている。では」

返答を待つ間もなく逃げ出すように立ち去りながら、外套の中でこっそりと手袋を腕の方へと伸ばし、鳥肌の立ってしまった腕を隠そうとする。これくらいさつさと逃げてしまう方が変に追われずに済む、とルークはキリキリと痛む腹を押さえながら歩く速度を上げる。

研究室の扉の鍵を閉めると、ルークは額の冷や汗を拭いた。ふらふらと窓辺の机に向かい、体重を机に任せようと手をついて深く息を吐いたのち、しばらくその姿勢で頭の中を整理する。無理やり引きずり出されてしまった記憶を奥へ押し込み、さっきの出来事を振り払う。

こんな記憶、無い方が——。考える余地の無い中で現れた発想に、ルークは心臓を縮こまらせる。その言葉を、忌々しい過去と共に記憶の底へと沈めた。

疲れを取るためにルークは椅子を引き、倒れるように座る。柔らかな背もたれが付いた椅子が、彼の背をほんのりと押し返す。目の前の窓の外を、何を見るでもなく眺める。空の高くを流れる雲、戯れながら飛ぶ鳥、賑わう城下町。心の波が静まってくると、次の任務に必要な物が頭に浮かび始めた。長旅用の魔導書、ユノやブラン

カと別行動をするときの連絡用に共鳴石をいくつか、旅先での報告用に共鳴鏡も必要か、などと紙に書き留めながら考えていると、余計なことは頭から抜け落ちていく。持ち出す物の一覧を書き終え、ルークは背を伸ばす。疲れも取れてきたルークはその勢いで立ち上がり、棚や引き出しから魔法道具を取り出し始めた。魔法道具を吟味する眼差しは、宝物へ向けるものと全く同じものだった。

荷物をまとめ終えたルークは部屋の外、大きめの廊下に出る前に扉を少しだけ開け、廊下の様子を確認する。すると近くに人を待つような背の高い人影があることに気付いた。詳しい人相は分からないものの、不安要素を取り除くべく人影が動くまで待つことにしようとした。しかしその人物がルークに気付き、わざと足音を立てながら研究室の方へ向かってきた。扉を閉めようとしたが、聞きたくなかった声で「待て」と言われ、仕方なく外に出ることにした。

魔法の仕掛けによって鍵が勝手に閉まるのを確認し、ルークはやってきた男と同じようなしなやかな面を突き合わせる。

「ルーク。城に來ているという噂を聞いて、話そうと思つて待つてみれば、私からコソコソと隠れるような真似をして……」

「……侍従長殿」

ルークは散々この男、ラクドリンから逃げ回っていたが、観念することにした。

「おや、『叔父上』と呼んでもらえると思ったのだがね」ラクドリンは目を細めて笑う。その奥にはルークを舐め回すような視線を隠していた。そしてひとしきり見終えた後は、彼に対して冷たく言い放つ。

「相変わらず、騎士の服に袖を通しておきながら研究者の真似事か……。はあ、兄上も陛下も半端なままのお前を甘やかしすぎだ」

「……」

自らが押し黙ることで、周りの人間も二人の会話に耳をそばだてていることが分かる。しかもそれはあくまでも噂話の種として興味を持たれているだけであることもまた、分かりきった話だ。

「……私は陛下に与えられた役目を全うし、国に尽くす。それだけです」

あえてラクドリンが言い返せないような言葉を選ぶ。それが彼なりの反撃であった。しかしラクドリンのお気に召さなかったようで、小さく舌打ちをした上、腹の底からの軽蔑を込めた声色で返される。

「……相変わらずかび臭い本みたいだ。書庫の肥やしになることで満足し、陽に当たろうという野心を感じない」それがなんだ。ルークはそう言おうとしても、喉につつかえて出てこない。それを許さないのが、ルークの叔

父、ラクドリ・フルズハーストだというのを、城に来て数年、散々味わってきたのだ。

改めて周りを見る。段々と人だかりができていく。逃げ出すにはどうすればいいか。ルークは作戦を練り、口撃を仕掛ける。

「侍従長殿、陛下に仕える身でありながら『野心』などと軽々しく口にするものではない。陛下のご意向で与えられた立場に不満でも？」

「なっ……」

ラクドリは顔を歪ませる。ルークは手ごたえを感じつつも、顔に出さず、なるべく早く叔父の逆鱗にあえて触れるように、淡々と言葉を続ける。

「与えられた仕事に文句を言うようでは、私や兄が居なくとも父が家督を譲ることは無いでしょうね『叔父上』」

ここまで言うと言が出るのが分かっていたルークは、ラクドリが胸倉を掴もうとするのを一歩引いて避ける。

「ルーク、貴様……！」

ルークの予想通り、野次馬の中に居た兵士がラクドリンを押さえる。こうなるように仕向けたのはルーク本人だが、自分と顔が似ている壮年の男が兵士の腕を振りほどこうと暴れる姿は、彼にとっては目も当てられない光景だった。

「ラクドリ様、お気持ちにはわかりますが、城の中で暴力沙汰は……！」

侍従には慕われているのだろう、数人の侍従がラクドリンを鎮めるために声をかける。その機会を見計らって、ルークは足を外に向けながら別れの声をかける。

「では、私は次の任務があるので。失礼します」

彼の背に視線が刺さる。いつものことだ、と心の中で言い聞かせる。そんな中で、ラクドリンの声が響くが、ルークは、聞かなかったことにした。

ここまで大騒ぎになってしまった以上、道を選ぶのも億劫になったルークは最短経路で城を出る。行きがけに挨拶した門番たちはまた彼に敬礼をしようとしたが、その表情を見て一瞬手が止まった。

若い門番が青ざめた顔で強面の門番に話しかける。

「……似てますね、おつかない顔すると、本当に」

「しっ……だから話題に出すなって」

ユノやブランカとの待ち合わせ場所を決めていなかったルークは、今日の嫌な出来事を全て忘れるために行きつけの店へと向かった。

大通りから外れているため若干立地が悪く、そのせいで客は少ないが、それがルークにとっては好都合であった。店の近くまで来ると頭巾を脱ぎ、風除けを踏まないように跨いで店に入る。顔なじみの店員が「あら、いらっしやい」と声をかける。ルークは店員に軽く会釈する

と、棚に置いてある焼き菓子を順番に見ていく。風除けの副次的な効果で店が甘い香りで満たされ、中ででうろろとするだけで、ルークの強張っていた顔が緩んでいく。ルークは値段も見ないまま小さな籠にクッキーやスコーンを入れていく。いっぱいになった籠を店員に渡すと、店員はルークの顔を見て「ケーキもいくつかありますよ」と伝え、今日のケーキの品揃えが書かれた表を見せる。

「……では赤苺のケーキを一つ」

ルークは店員が菓子を皿に並べるのを眺めながら、鞆から金銭用の袋を出し、銀貨を何枚も銭受けに並べる。店員は目視で銀貨を数え、「あら、こんなに」と言いつつ、皿を盆に乗せた。

「いつもありがとうございます。どうぞ寛いでお待ちください。お茶と一緒にお待ちしますね」

ルークは「どうも」とだけ返し、店の奥に少しだけ用意された椅子に腰かける。しかし度々店員の様子が気になり、良くないと思いつつもちらちらと店の表へと視線を送る。しかしやはり思い直し、机の木目を眺めて時間を潰そうとするが、やはり気になって顔を向けてしまふ、そんなことを何度か繰り返していると、淹れたてのハーブティーの香りがふわふわと流れてきた。ルークは背筋を伸ばし、やってきた店員に悟られないよう、何事も無かったように振る舞う。

「お待たせしました、それではごゆっくり」

店員は変わらぬニコニコしながら厨房へ戻っていく。それを見届けると、ルークは手袋を外し、クッキーをつまむ。口に入れた瞬間、携帯食用の物と違った控えめな甘さがルークの頬を緩ませる。そしてハーブティーをカップに注ぎ、口元へ運ぶ。まだ火傷しそうなほど熱いことを確認してそつと受け皿に戻し、今度はフォークを手に取り、ケーキの上に乗った赤苺を避けながらケーキを掬い取る。ふわつとしたスポンジと真つ赤なソースを一口。ソースの甘酸っぱさが彼の好みにぴったりで、口中で余韻を感じながらも次の一口を切り取る。その一口の後にはスコーンに手を伸ばし、乾いた口の中を温かい茶で潤す。そしてまたケーキをひと掬いする。

気が付けば、皿の上に赤苺を一つ残すだけになってしまった。ルークは惜しみながらも赤苺にフォークを刺し、一思いに頬張った。ソースとはまた違い、瑞々しさと少しの酸味が最後の一口にふさわしい清涼感を演出する。

ルークは口元をハンカチで拭い、汚れた面を裏にして畳んでポケットにしまふ。それを見計らったように、店員が盆を下げて来た。

「ユノ様から言付けを預かってますよ。ブランカさんと一緒にいつもの所で待ってる、とのことですよ」

「そうか。……いつもすまない」

ルークが荷物をまとめて席を立つと、店員はルークに深々と頭を下げる。

「店を開いたころからルーク様にはお世話になっておりますので、お気になさらず」

「……では、また」

ルークは外套の頭巾をかぶり直し、店を出る。少し陽の落ちてきた街を颯爽と歩き、ユノとブランカの待つ場所へと向かった。

〈五話へ続く〉